

# 1 事業導入の経緯

## 陣場地区の遊休荒廃地化

丸子地域にある陣場地区は、遥かに浅間山、北アルプスなど360度が見渡せる眺望に富み、自然環境にも恵まれた台地だが、年間降水量が900ミリ以下と少なく、干害を受けやすい地形である。

以前は養蚕のための桑園が広がっていたが、昭和40年代からは、薬用人参が桑園に変わり栽培されてきた。しかし連作障害や価格の低迷により作付けが減り続けるとともに、農家の高齢化等の要因もあり、平成に入ってから陣場台地の農地約25ヘクタールのほとんどが遊休荒廃地化していた。



昭和60年当時の薬用人参や桑畑風景

## ワイン用ぶどう栽培の導入

このような中、メルシャン株式会社が世界水準の高級ワインづくりを目指し、長野県内に自社栽培のためのワイン用ぶどう栽培地を探していたところ、緩傾斜で風通しが良く、寡雨多照な気象条件の陣場地区が候補地となった。地域では、遊休荒廃農地の解消と地域振興を鑑み、平成12年に地元区長や町議会議員、農業委員などで、陣場地区土地利用研究委員会(現名称:陣場台地研究委員会)を組織し、土地所有者約100人の合意のもと、面積約12ヘクタール(第1期分)の事業導入を決定した。

# 2 事業の経過

## 農業生産法人 ラ・ヴィーニュの設立



株式会社の農業参入が農地法で規制されていたため、メルシャン株式会社は『農業生産法人 ラ・ヴィーニュ』を設立し、長野県農業開発公社を経由し、農家から畑を借り受け事業を開始した。

- ・借地期間: 20年(10年経過時点で借地料の見直し)
- ・借地料: 年10,000円/10a

## ぶどう栽培用農地の造成

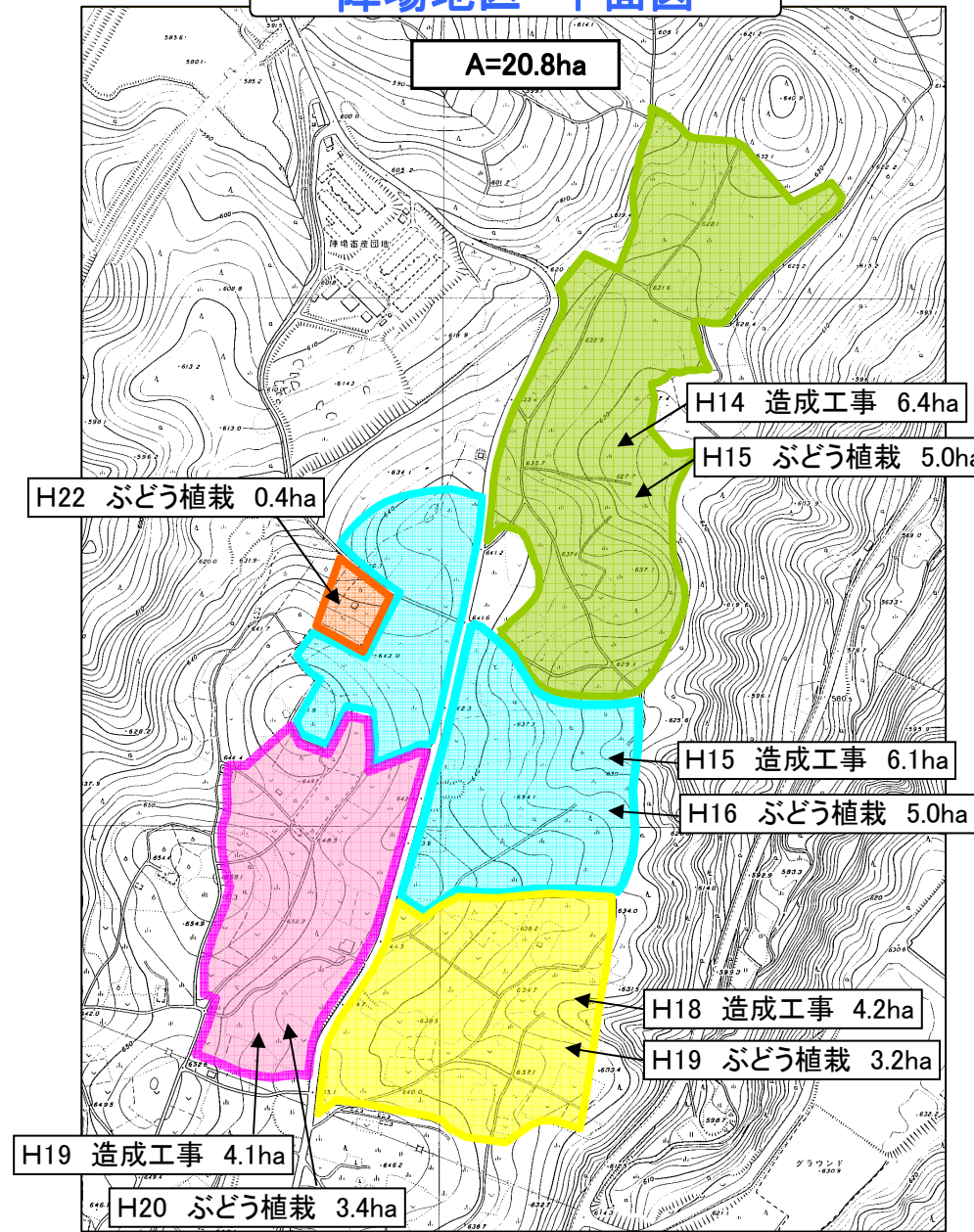
平成14年から16年まで県の地域づくり総合支援事業により農地造成やぶどう垣根資材、ぶどう苗について補助を受け事業を進めるとともに、排水路や調整池の整備なども実施した。そのような中、ラ・ヴィーニュより更なるぶどう栽培の拡張について打診があり、陣場地区土地利用研究委員会、地権者の賛同のもと、平成18年度から拡張分の造成計画を策定し事業を進め、平成19年度末に約21ヘクタールの造成が完了した。

## ぶどう苗の植栽

ぶどう苗の植栽は、排水路等を除いた17ヘクタールで計画され、平成15年から22年にかけて、約7万本(栽植密度: 10アールあたり約400本)が垣根栽培方式により行われた。品種はメルロー、シャルドネなどの6種類を中心に、ほかにも試験品種として、ピジュノワールをはじめとした4種類のぶどうが栽培されている。10アールあたり約0.5トンの収穫量を目指し、ラ・ヴィーニュによる地元雇用も含め常時4人体制で、丹精込めて高品質なぶどうが育てられている。

# 陣場地区ワイン用ぶどう団地造成事業

## 陣場地区 平面図



造成前 造成中 造成後

事業面積										
年度	14	15	16	17	18	19	20	21	22	計
造成工事 (ha)	6.4	6.1	—	—	4.2	4.1	—	—	—	20.8
ぶどう植栽 (ha)	—	5.0	5.0	—	—	3.2	3.4	—	0.4	17.0

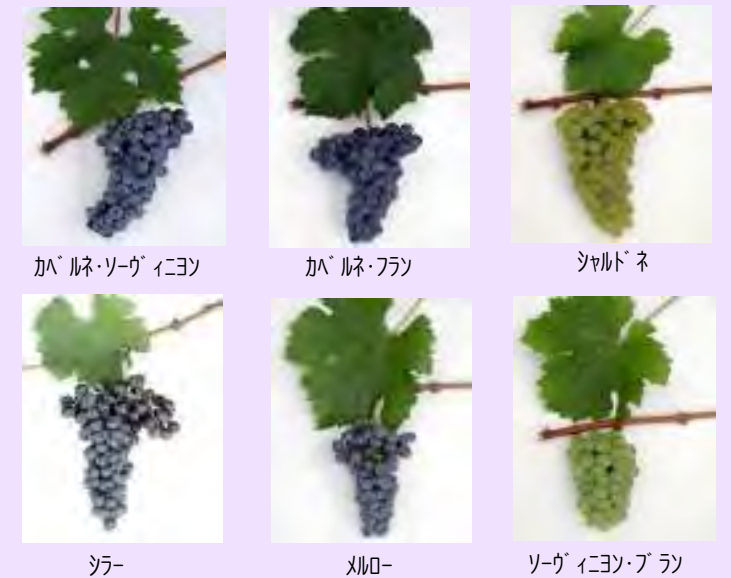
# 3 今後の展望

ラ・ヴィーニュでは、現在の幼木が成長し、成木となる近い将来には、80トン以上の収穫を目指している。収穫されたぶどうは勝沼のシャトー・メルシャンで醸造され、数年後ワインとして世に出る日まで、地下貯蔵庫でゆっくりと熟成されている。



かつて遊休荒廃地化していた農地は、陣場台地研究委員会が中心となって用地をまとめ、ラ・ヴィーニュが年間を通じて丹精込めて管理することで、誰もが感動を感じる広大なぶどう畑に生まれ変わった。この事業の成功は、上田市に新たな魅力や経済的な効果を生み出し、産業や観光振興に必ずや寄与するものであり、今後ワイナリーの誘致等による更なる地域の活性化に、地域住民は大きな期待を寄せている。

## 陣場で栽培されている主なぶどう品種



ぶどう収穫量	
平成16年	0.1t
平成17年	1.1t
平成18年	10t
平成19年	6t(雹害)
平成20年	14t
平成21年	36t
平成22年	18t
平成23年	38t
平成24年	73t

